



つのぶえだより

439号 2017・10・1

角笛幼稚園

年主題 愛されて育つ

10月の聖句

神は愛です。

ヨハネの手紙一 4章 16節

第2保育期が始まって、早1か月が経とうとしています。9月23日には、高井戸小学校で運動会が行われました。前日からの雨で、3年続いたの体育館での運動会となりましたが、今年はお休みの子もなく、全園児が参加しての運動会を行うことができ、感謝でした。

運動会の前日までは、幼稚園で元気に運動会での種目に取り組んでいたお子さんたちの中にも、当日は気分が乗らないままに過ごすことになった子もいたことでしょう。保護者のみなさまにとって、運動会で、自分の子どもが元気に走り、笑顔で踊り、前向きに種目に取り組む姿を見たいとお思いになるのは、私も4人の子どもたちの親としてよく分かります。しかし、立ち止まって考えてみる時、私たち自身が、幼い頃から大人へと成長していく過程で、いつも元気に、何の不安や戸惑いも覚えずに、笑顔で過ごしてきた訳ではないことを思います。それは、大人になった今でも、日々の生活における私たち自身の姿において、そうでしょう。

9月に行われた杉並区の私立幼稚園の園長研修会において、不登校や引きこもりをはじめとして、さまざまな課題を抱える子どもや若者たちと長く関わりを持ってこられた方の講演を聞く機会がありました。講演の中で、現代の日本の子どもたち、若者たちの抱えている問題の一つとして取り上げられたのは、他国の同世代の人たちと比べて自己肯定感が異常なまでに低いという統計的な事実です。一体その原因は何であるのか。講師の方の考えによれば、日本において、子どもに対する親の育て方、関わり方が、子どもを親とは違う一人の人格として受け止めて育てるというよりも、親や社会の期待を無意識のうちにも投影するような仕方育てている、そのことの中にある問題だということでした。しかも、深く考えさせられたのは、その問題は、今に始まったものではなく、日本において、親が子どもを育てる中で連鎖してきたものだと、講師の方が言われたことです。つまり、親や社会の期待を背負って育てられた子どもが親になって、同じように自分の子どもに対してそのような育て方をする。それがずっと連鎖してきたのだ、というのです。しかし、そうであれば、なぜ、今になって、そのことから来る問題が、子どもや若者に顕著に現れるようになってきているのか。それは、かつては、子どもが、祖父母やおじさん、おばさんなど、親以外の家族とも一緒に生活したり、隣近所の方たちとも身近に接しながら育っていく環境があったからだ、と講師の方は言われました。子どもが、自分という存在に対して、親とは違う見方をしてくれる人たちに囲まれていたから、親からの目に見えない期待とは違うところで自分を見ることができたのだ、というのです。しかし、今は、かつては子どもたちの周囲にあった人々との関わりが希薄になり、子どもと親との直接的な関わり合いの比重が増したことによって、問題が顕在化してきているのだ、とのことでした。その講師の方の考えには異論もあることでしょう。しかし、全くの的外れな考えだなどとは言えないように思います。そして、講師の方が、私立幼稚園の園長である者たちに向けたその講演の最後に言われたのは、こういうことでした。「幼稚園は大事ですよ。今の日本の子どもたちに対して重大な使命を負っていますよ」。つまり、一人ひとりの幼な子に対して、親御さんとは少し違う目線をもって見ること、そして、その目線を親御さんとも共有しながら、子どもの育ちに関わらせていただく場所として、幼稚園には大事な使命があるということと言われたのです。

「神は愛です」。聖書は、神さまの愛が私たち一人ひとりに向けられていることを語ってやみません。今を生きる私たち一人ひとり、子どもたちや若者たちにも、神の愛の眼差しが向けられている。自己を肯定するなんてとてもできないという者にも、「あなたも神さまに愛されている存在だ」と語り掛けるのです。神の愛の中で肯定されている自分を受け止めていく。そこに、キリスト教保育の根幹もあるのだと改めて思います。角笛幼稚園のお子さんたち一人ひとりに向けられた神さまの眼差しを、保護者のみなさまと共にいつも覚えてまいりたいと思います。

園長 七條真明